CORE Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

翻 訳

グレアム・ハフ
『「フェアリー・クイーン」序説』

第一章 「スペンサーとロマンティック・エピック」

小田原 謠 子

<I>

ミルトンにとって『フェアリー・クィーン』の詩人は，「私たちの，思慮深い，真面目なスペンサー。スコゥタス[1]やアクィナス[2]よりもよい教師」であった。ハズリット[3]にとって，「真実への愛ではなく，美への愛がスペンサーの精神の主動原理」であることは，同じほど明白であった。彼に言わせれば，スペンサーの詩は，すべてこれ妖精の国であって，もし，人がアレゴリーに干渉しなければ，アレゴリーは人に干渉しないのである。この二つのうち，どちらかの見方でスペンサーを見ることがきわめて自然だと考えている読者を対象にして私がこの本を書いているとは，とても考えられない。スコゥタスやアクィナスよりもよい教師を見い出している人が，それ以上の指図を求めて私のところへやって来ることはないだろうし，また，スペンサーを，純粋なおとぎ話の語り手として楽しむ人たちは，指図など，まるで求めはしないだろう。しかし，今日の詩の読者，研究者のほとんどがこの二つの見方の，どちらつかずの状態にあり，彼らのスペンサーを読む楽しみは，極端な見方に妨げられている。もっと価値のある観点への道が，常にいくつも開かれていたし，また，それらが推奨されてもきたのだが，二つの過度な見方が，実際，半ば無意識のうちに最高に魅力的な力を及ぼしてきたのである。それは，教訓主義か――というのは，読者は『フェアリー・クィーン』は一様に寓意的であって，またアレゴリーは一様に教訓的であると信じさせられてきたからであるが――あるいは，道

なき魔法の森でのさすらいかであった。そして，このうちの一つ，あるいはその両方が，前の世代には魅力的だったとしても，我々にはそうではないのである。スペンサーの別の読み方への糸口を与えることが，あまりにも長い間多くの人に見落されてきた，詩的な楽しみの源を復活させるのに役立つかも知れないと言えるのではないだろうか。

見落されてきたことには，疑いの余地がない。今世紀，スペンサーは，私たちのすべての偉大な詩人たちのうちで，最も無視されてきた。彼の伝統的な地位はと言えば，彼は，シェークスピア，チョーサー，ミルトンと並び，私たちの最も偉大な先輩作家の一人なのである。以上が彼の仲間なのであり，そして，それは，彼が，これらの書物が書かれているところに属すということを信じてのことなのである。しかし，今日の詩の研究家及び読者の好みを知っている者なら誰でも，驚くほどわずかしか，彼の詩が読まれていないことを証言するだろう。『失楽園』を読み終えずにおくことは不可能だと考える人でも，『フェアリー・クィーン』を読み終えたことがないことを認めるだろう。スペンサーの昔日の名声が攻撃されているということではない。こういうことが起こるのは，決して，詩人にとって純然たる不運ではないのである。三十年かそこら前の，名高いミルトン「排撃[4]」以来，ミルトンは，以前よりも，より厳密に読まれ，より誠実に評価されていると私は思っている。論争は関心をひきおこし，そして，関心は，低俗な砂あらしよりも長生きする。しかし，スペンサーが一般に大変高く評価されていたロマン主義時代から後，彼の名声は，静かに，彼のもとからすべり落ちていった。あるいは，虚名としてしか残っていない。神殿の外観は損われてはいないのだが，訪れる人が，驚くほどわずかしかいないのである。

いくつか理由が考えられる。スペンサーと私たちとを分つ淵があるのだが，彼の言葉が難解でなく，彼の態度が攻撃的でないため，私たちは，それをはっきりと意識しないのである。キリスト教的，英雄的，騎士道的，ロマンティック――私たちの世界は，少しもこんなものではない。スペンサーの世界へ入ると私たちは，異質な世界に入ることになる。私たちは，

異なった言葉，異なった会話を学ばなければならない。そして私たちは，このことをしばしば見すごしてしまうのである。私たちは，スペンサーに，彼が実際に出来るよりもはるかに多く，私たちの二十世紀的予想を満足させてくれることを期待し，満足出来ないことがわかると，失望感，失敗感を感じるのである。ダンテの世界の方が，もっと異質であるが，それでも私たちは必要な解釈に少しは成功すると言う人があるかも知れない。しかし，ダンテの火打ち石のように頑固な顔は，妥協を許さない厳格さをもって私たちの顔にたちむかうので，私たちには，こちらの期待をすべて変えてしまうか，さもなくば，ダンテを読むのを全く諦めるかしか出来ないのである。スペンサーに関しては，事情は違ってくる。気楽で，なじみ深く，イギリス的なものが大変多くあるので，私たちは，より多くのものを期待する。そして，彼が，そのほとんどの臆説に於て，私たちの世俗的，非教職階級制的，功利的世界から，いかにかけ離れているかに気がつかないのである。

他の理由は，より技術的なことである。現代の詩の理論は，それとなく言っても，率直に言っても，叙情詩を中心としたものであって，長詩を論ずるには難があることは有名である。そして，そのような理論で，『フェアリー・クィーン』のような緩慢で，控え目な構成の長詩を論ずるのは，最も難しい。散漫な物語文学への好みは，今日では，小説によって十分に満足させられているので，新しい物語詩は，ほとんど書かれず，また，古い物語詩も，ほとんど読まれることがない。またスペンサーには特別な難しさがある。少なくともイギリスに関する限り，彼の詩は，忘れられた種類のものに属しているのである。「ジャンル」論，すなわち詩の「種類」を，古い形のまま蘇らせることは出来そうにない。あらかじめ定められた詩のタイプが，決まった数だけあって，各々が固有の法則を持っているという考え方は，18世紀以後の詩の現実の多様性に適応させるには，厳密すぎるのだ。しかし，慣例的にではなく，発見的に見れば，すなわち，枠組としてではなく，地図として見れば，それはまだきわめて有用である。伝統的な種類わけ――悲劇，喜劇，叙事詩，牧歌，その他――は，人間経験

の主領域の，大まかな地図を作りあげる。そして，それらに伝統的にわりあてられたレトリックの特殊な型が，様々な表現の可能性の大まかな組み立てを供給するのである。種類の概念が，実際に，作品形成の上での組成分たる要因であった頃の古い文学に関しては，ある作品がどの種類に属すかを知ることが，しばしば，その作品を理解するために必要な準備行為だったのである。『リシダス』[5] は，牧歌について何も知らない人にとっては，まるっきり，わけのわからないしろものであるだろうし，今日の大学で供給される，批判的な日曜大工道具一式をもってしては，スペンサーに，たやすく近づくことは出来ない。現代の道徳的偏見という貧弱な装備ですべてのものを攻撃するという手順は，この場合うまくいかないのである。

私たちは，『フェアリー・クィーン』が，忘れられた種類に属していると言った。イギリスでは，忘れられてから約一世紀が経っている。イギリスの読者の記憶からそれが消えていくのと平行して，スペンサーの名声は，静かに衰えていったのである。『フェアリー・クィーン』が属しているロマンティック・エピックは，19世紀半ばまで，250年間，イギリスの読者の文学体験の，重要な，生きた一部であった。スペンサーの作品は，文学的情況の中にあったのであり，今日よくあるように，他の詩的体験とかかわりなく，孤立した変種として現れたものではないのである。『フェアリー・クィーン』の最初の三巻に付けられた，サー・ウォルター・ローリー[6]あての手紙の中で，スペンサーは，ホメーロスとヴェルギリウスの他に，アリオスト[7]とタッソー[8]を自分の師としてあげている。古典作家たちに負うところは，かすかで，漠然としたものであり，ここで感謝を述べていることには，おそらく，ルネサンス期の長詩の作者なら誰にでも形式的に期待される感謝以上の意味はない。近世イタリア人のアリオストとタッソー，特にアリオストに負うところが，特殊かつ，大である。『狂乱のオルランド』[9] なくしては，『フェアリー・クィーン』は，その構成と雰囲気を持ち得なかった。この中の最も有名な何節かは，あきらかに『解放されたイエルサレム[10]』から借りてきたものであり，私自身としては，『フェアリー・クィーン』全体にある道徳的雰囲気は，大いにタッソーに影響されたもの

と信じている。これらについての詳細は以下にまわしたい。今のところは，スペンサーの死後200年を越える期間中はいつでも，教養ある読者は，これらのつながりを，きわめてよく知っていたであろうことを指摘するにとどめておく。あるいは，これが誇張であるとしても，彼らは，自分たちが，どこか他のところで，同じような漠然としたタイプの詩を読んだことを知っていたと言えるだろう。今日では，ダンテの影響は見落されていないのに，アリオストやタッソーの影響は，おそらく，全く見落されてしまうだろう。

16世紀から19世紀半ばまでの，イギリスに於けるロマンティック・エピックの流れは，ここでしばし立ちどまって述べるに足る価値がある(一)。最もいい証拠は，翻訳の数である。サー・ジョン・ハリントン[11]が，『狂乱のオルランド』の，わいせつなことで悪名高い第28篇をエリザベス女王の女官たちの楽しみのために訳し，女王は，苦行として，彼に残りの45篇を訳すよう命じた。ハリントン版は，1591年に出版され，1607年と1634年に再版された。18世紀には，フール[12]が新たに翻訳し，この翻訳は，1773年から1806年までの間に，少なくとも6回，版を重ねた。1823年から1831年までの間に，スコットの友人のローズ[13]が，また新しい（そしてはるかに厳密な）翻訳を行い，これが1858年と1864年に再版された。タッソーの運命も似たようなものだった。『解放されたイェルサレム』の部分訳を，R. C. とかいう人物が行った。そしてその続きを行ったのが有名な魅力あふれる1600年のフェアファックス版で[14]，これは，1624年に再版された。フールはアリオストの翻訳の他に『解放されたイエルサレム』を，1763年に訳し，これが1807までの間に9回版を重ねた。ハントが1818年に，ウイフェンが1824年に，そしてレシンガム・スミスが1870年に，それぞれ新しい翻訳を行った。私が見落した翻訳もあきらかにあるはずだ。であるから，イタリア文学が，19世紀後半には，現在読まれているよりも多くの人々に読まれていたという事実を別としても，アリオストとタッソーの作品は常にイギリスの読者の役に立っていたのである。

彼らの作品への文学的言及は数限りない――その多くは，偶然の，何心

ないものではあるが。スコットのアリオストに向ける愛が，彼の小説に入っている。『ロブ・ロイ[15]』の主人公であるフランク・オスバルディストン[16]のロマンティックで詩的な野望は，この本のはじめの部分で，彼が，『狂乱のオルランド』を訳すことにあらわされており，あとの章では女主人公のダイアナ・ヴァーノン[17]が，『狂乱のオルランド』の部分部分を，実際に声に出して読むのである。『レッドゴーントレット[18]』の似たような主人公のダーシー・ラティマー[19]は，彼の散文的な友人のアラン・フェアファクス[20]に，レッドゴーントレットの馬のしりがいに拾いあげられた出来事を（Ⅳの手紙）語る時，アリオストに言及する以上によい説明の手段を見い出さない。

> アリオストが描写したように，魔法使いのアトランテが，うしろに縛った騎士を連れて，ヒポグリフ[21]に乗っているのを僕は思い出したんだよ。君はとても実際家だから，あの魅惑的でおもしろい詩を軽蔑しているんだろうけど。

ハズリットは『エジンバラ・レビュー[22]』でアリオストとタッソーの両者を論じている。ソーズワスはアリオストを読んでいて，コールリッジを彼の作品に導いた。キーツの「アポロによせて」には，ホメーロス，ヴェルギリウス，ミルトン，シェークスピア，スペンサーと並んで，タッソーの名があげられている。そしてもちろんバイロンは，タッソー伝説に詩を奉げている[23]。19世紀半ば頃，タッソーは洗練された女性の教養の一部だったようである。『ダニエル・デロンダ[24]』の登場人物であるグェンドリン・ハーレス[25]は，特に知的な女性ではないが，5章で，「私はタッソーが大好き」と言い，続けて『解放されたイェルサレム』（彼女はイタリア語の原題を言う）について，「私たちは，学校で読んで暗記しました。」と言うのである。画家のサミュエル・パーマーは，1866年に，ジュリア・リッチモンド嬢にあてて「あなたにフェアファクスのタッソーを推薦させて下さい。もっともあなたは，原書をお読みになっておられるかる知れませんが。」と書いている。(二)

現在では，このような親しみやすさは，全く姿を消しており，詩的体験が全領域にわたって，一般の人々の意識からこぼれ落ちている。詩的体験の領域とは，英雄的なもの，超自然的なもの，ロマンティックなもの，そして単に空想的なものが，奇妙に混じりあった領域なのである。政治から宗教的献心へ，歴史からアレゴリーへ，地理上の精密さからとっぴな空想へ，また人間の倫理的行動から純然たる魅惑状態へ至るには，違った調子，段階，転換のすばやい引き継ぎが要るのである。これがロマンティック・エピックの特徴なのであるが，現代のイギリスの読者がはじめてそれをスペンサーの中に見い出す時，それを迎えるための一連の予期，準備がないらしい。最近の文学の好みは，写実主義文学，小説，そしてしばしば小説批判が生み出した散文的な道徳主義にあまりにも基きすぎている。これは，精神現象に照らしてのもっともらしさがほとんど重要視されず，現実の世界での出来事のどのような事態も全く度外視され，また，矛盾しない一連の出来事を一貫して作りあげることで道徳的意義に到達するというやり方ではなく，半ダースもの違ったやり方で――アレゴリーによって；アレゴリーとは言えないが，典型的な価値を持っていると思われるロマンスによって；様々な種類の絵画的イメージによって；それにまた，登場人物や行為に，私たちが現実の生活の中で与えるような価値を与えるという，一般的な物語文学の方法によって――それに到達する一種の物語文学を読むためには，あり得るうちで最悪の準備である。額に深いしわをよせ，あぜに鋤を押すといった風な，今日のたいそう批判的な読み方につきもののやり方は，ロマンティック・エピックにふさわしいやり方ではない。軽快さや，ほとんど無頓着なほどの機敏さをもって，調子や気分の変化に順応するのが，全体の意味をつかむのにより有用なやり方である。(これはハズリットが全体の意味の欠如を満足のうちに黙認したのとは違う。) そしてスペンサーにとって，かつての状況を復活させること，そして，彼がその中で詩作した伝統の概念のいくばくかを得ることは，たしかに非常に有益なことである。『フェアリー・クィーン』を，エピックの伝統の中の適切な位置に置くこと，それが本書の主な目的なのである。

＜Ⅱ＞

イタリアのロマンティック・エピックの遠い祖先はフランスの武勲詩であるが，これは形式に於ても精神に於ても非常に異なった世界に属しているので，公平に言えば，ロマンティック・エピックは，厳格な原型を完全に濫用したものだと言える。このフランスの古いエピックにはいくつかの詩群があるが，いずれも，キリスト教国とサラセン人との争いが主題であったり，あるいは冒険の背景となったりしている。イタリアの詩は，シャルルマーニュとその貴族たちを中心人物にしているカロリンガ詩群[26]に由来している。幸運にもこのことから，私たちは例証，対比のために，『ニームの荷車』[27] とか『ルイの戴冠[28]』のような補助的な「歌」にではなく，フランスのエピックの中で最も古く，最も重要で，最も有名な『ローランの歌[29]』そのものに連れ戻されることになる。

『ローランの歌』は，ほとんどすべての点で，つまり題材，構成，スタイル，気分等に於て，同時代の詩や，『ローランの歌』に由来するイタリアのエピックと異なっている（というのはこの子孫は，疑いもなく直系ではないから）。ましてスペンサーと異なっていることは言うまでもない。しかし，はじめに，これについて述べることは，まったく的はずれというわけでもない。スペンサーのロマンスの世界は，古い，高度に洗練された土壌であり表面下にはスペンサー自身が知っているよりも多くの文明の遺物がある。スペンサーがその源として頼った文学の遠い起源を簡単にたどることは，興味深いことであり，また，価値あることでもある。カロリンガ詩群は，その後継者すべてに，本質的に重要な遺産を残したと私は信じている。

『ローランの歌』はチュロルデュス[30]とかいう人物の作であると言われている。おそらく12世紀のものである。よく知られているように，これは，むき出しの情熱的な単純さをもって語られた，悲劇的ヒロイズムの物語である。悲劇的なあらすじからの脱線はない。そしてスタイルと言えば，一つの直喩しかなく，それが二つの線に分かれている。登場人物は武人と英

雄で，シャルルマーニュのように，王侯で，敬うに足る人物か，オリヴァーのように賢く，慎しみのある人物か，ローランのように，無謀とも言えるほど情熱的で勇敢な人物か，チュルパン大司教のように忠実か，ガヌロン[31]のように裏切り者かである。しかし，彼らのうち一人として，無関係な冒険に携わる者はなく，恋に落ちる者もなく，みな決して英雄的かつ悲劇的運命から，それることはない。あらすじは，基本的に単純な考えを広げて扱ったものである。シャルルマーニュとその軍勢が，サラセン人との戦いに勝ち，スペインからの帰途にある。ピレネー山脈縦断に際して，ローランが後衛の任を与えられる。彼は軍勢の半数を与えようという申し出を断り，わずか2000の兵を連れていく。しかし彼を嫌うガヌロンの裏切りのため，ロンセズバリエスに着くと，サラセン人の大軍に待ち伏せされている。シャルルマーニュの援助を求めるために角笛を吹けという戦友オリヴァーの忠告を受け入れず，ローランは最後まで戦いぬこうとする。彼は英雄的に防御するが勝ち目はない。ついに彼は角笛を吹く。その音色は30マイル先まで届く。シャルルマーニュはそれを聞き，戻って来る。が，遅すぎる。オリヴァーは死に，ローランも死に，そして，シャルルマーニュの到着は，彼の貴族たちの復讐をするためにしか間にあわない。

気高い単純さを持つこの英雄的な伝説が，アリオストやスペンサーの，流動性に富む，こみ入った事物と何の関係があるのだろうか。ただ次のことだけ，つまり，ロンセズバリエスでのローランの角笛の音が，中世ヨーロッパにこだまし，全く新しい文学をおこすことになったということだけである。先に述べたように，この『ローランの歌』は，おそらく12世紀初頭のものである。これに述べられている事件は，多分，一部歴史的であるが，大部分伝説的なものである。シャルルマーニュは，スペインに進撃し，帰途，778年に，ピレネー山脈中で，後衛との連絡を断たれた。しかし，カロリンガ詩群の他の部分では，彼が，パリでサラセン人たちに包囲されることが述べられている。そして，このことについて歴史は何も知らない。私たちがここに持っているものは，周囲の異教の敵と戦うキリスト教国の戦士の姿なのである。シャルルマーニュが実際にこの考えを受け入れ，共

鳴したということは，なるほど歴史的である。しかし，それが，『ローランの歌』の中に，これほど深く入りこんでいることには，他の要因がある。11世紀の終りは，第一次十字軍の時であり，異教徒を相手とする聖なる戦いの観念が，フランスの心を満たした時である。ローランが，最初の戦いで最初の一撃を加えた後，「私たちは正しく，この異端者共が間違っているのだ。」[32] と叫ぶ時，こう言っているのは，歴史的には架空の彼の時代の精神であると共に，まぎれもなく，第一次十字軍の精神でもある。そして，11世紀の精神が8世紀の精神と混じりあっている十字軍精神は，のちの詩にとって，大変重要になってくる。それは，クリスチャン・エピックのはじまりを意味しているのである。

「私たちは正しく，この異端者共が間違っている。」これは新しいことであった。エピックは，常に，軋轢によって生きてきた。しかしそれは，今日に至るまで，単に二つの陣営の軋轢である。おそらく，どちらも神に守られており，おそらく，どちらも気高く，どちらかが勝つ運命にあるが，それはよりすぐれた武勇によってか，本質的に人間的なあらわれ方をした神の偶然の援助によってのみなされるものである。ホメーロスはギリシァ方の観点から書いたが，彼は，ギリシァ人が正しくトロイア人が間違っているなどとほのめかしてはいないし，また，トロイア人が正しく，ギリシァ人が間違っているともほのめかしていない。ヴェルギリウスは，神聖な使命を持つ英雄という観念にかなり近づいている。しかし彼も，彼の描いたトロイア人たちがラヴィニア海岸に着いた時，彼らが，あらかじめ運命に定められた，神聖な優越性を持っていて，ラテン人が彼らに敵対するのは間違っているなどと，ほのめかしてはいない。双方が，等しく尊敬に価する神に支持されている時，そのどちらもが己の立場に，至高の超自然なるものの認可を主張しないのは，多神論の結果（私には大きな天恵の一つであると思える）なのである。片方が信仰の一門であって，他方が外的な暗闇の中にあり，邪悪，よこしま，無知をあらわすなどということは，決してほのめかされていない。であるから，二種の軋轢――人間的に，また歴史的に，たまたま敵対することになったにすぎない二者の間の軋轢と，

片方が，永遠に，かつ超自然の目から見て正しく，他方が，永遠に，かつ超自然の目から見て誤っているという二者の間の軋轢――には違いがある。

第二の概念，すなわち，超自然の認可を伴う軋轢という概念は，クリスチャン・エピックの独創であって，様々な形で，また度合を変えてクリスチャン・エピック総てに流れている。それは，より取るに足らないイタリアのエピックの中にさえも，全く存在していないわけではなく，スペンサーのレッドクロス・ナイト[33]やサー・アーティガル[34]の働きには全重量をもって戻ってくるのである。この概念は『ローランの歌』の中では中心的な重要性を持っているが，それは，第一には，話の主題という理由からであり，第二には，それが書かれた十字軍時代という理由からである。カロリンガ詩群がイタリアで変化させられロマンティックにされた時には，この尊厳な主題は全く消え去ってしまっただろうと思われるかも知れないが，決してそうではない。イタリアの翻案の特徴は，それが東洋での，とっぴな冒険に満ちていることであり，そこでは，シャルルマーニュの12勇士の一人，――ふつうリナルドとされている――が，異教徒の姫と掛り合いになる。しかし，いかに多くの空想的なエピソードや無関係な人物が取りまいていようとも，シャルルマーニュは，キリスト教徒の王としての性格をとどめており，またローランは，キリスト教徒のチャンピオンとしての性格をとどめている。ローランは，カソリックの世界の擁護者として，よりふさわしく機能出来るようにと，ローマ人的にさえなっている。そして話は，パリでサラセンの大軍に包囲されるシャルル，つまり外界の暗闇の軍勢に取りまかれているキリスト教世界へと戻るのである。空想とアイロニーにしか強い印象を受けないアリオストの読者にとっては『狂乱のオルランド』のこの側面を考えることは，バカげたことに思えるかも知れない。しかし，それでもやはり，その方向へ進まなければならない場合があるものだ。タッソーに関しては，そのような場合の議論の必要はない。反宗教改革運動の波に乗って，その精神を十分に表現した彼は，聖戦を自分のインスピレーションとし，主題としたのである。その精神と感情とで『ロ

ーランの歌』に貢献した第一次十字軍が，『解放されたイェルサレム』の現実の歴史的主題である。アリオストに於てもタッソーに於ても，信仰の切迫した事情が，境界の外側の者に対して，騎士道精神と礼儀とを排除するものではなかったことをつけ加えておかなければならない。

＜Ⅲ＞

カロリンガ詩群を含むフランス文学は，12世紀の終り頃北イタリアへ広がっていき(三)，100年の間，北イタリアは，文化的にはフランスの田舎であった。しかしその影響は，宮廷人，教養人だけに限られてはいなかった。カロリンガ詩群は，とりわけ人気があって普及した。ローランの物語と，それから派生した様々な物語が――特にリナルドの物語が著しかった――市場で，フランス語，イタリア語の混じりあった方言で歌われた。これらの物語は，13世紀，14世紀を通じて存続し，増え，文章が練りあげられ，ついに15世紀のはじめ頃，『フランスの王家[35]』と呼ばれる膨大な散文集に篇纂された。ちょうどマロリー[36]がイギリスでアーサー王伝説に対してなしたと同じ貢献を，この散文集がイタリアでシャルルマーニュ伝説になしたのであった。

しかしカロリンガ詩群は，イタリアの民衆の間で新たに生を得はじめたちょうどその頃，宮廷では人気を失いつつあった。物語は，もちろん，騎士道以前のものであり，以前の封建時代の生活様式をあらわしたものである。12世紀に発達しつつあった，高度に洗練された上品な宮廷では，精神の滋養物を，粗野でいかめしい武勲詩にではなく，クレチアン・ド・トロワ[37]のタイプのアーサー王ロマンスの語り手の複雑な魅力に求めたのである。愛，狩猟，馬上槍試合，騎士の武者修業――情緒，華麗さ，そして宮廷生活の気ばらしが，以前のエピックの単調な戦争にとってかわったのである。古いカロリンガ詩群が人々を満足させていた間，北部イタリアの宮廷人が手に入れたのは，凝った礼儀と，洗練された情緒を持つ，この新しい題材であった。

アーサー王文学は大変に広く，多方面にわたっているので，何がイタリ

アのロマンス・エピックに貢献したのかを認識することが重要である。アーサーはシャルルマーニュのように，異教徒の敵と戦うキリスト教徒の王である。しかし，彼の伝説のこの側面は，私たちが追っている伝統との関係では興味のないことがらである。クレチアン・ド・トロワでは，すでにアーサーの姿は背景に退いており，主題を提供しているのは，円卓の騎士一人一人の手柄なのである。そして，国家と国家との戦い，異教徒の敵を相手のキリスト教徒としての戦いという大きな主題が消えた後，これらの手柄は最も厳密な意味で個人的なもの，つまり，愛のためとか，個人の名声のために行われた，個人の武勇の行為なのである。事実，円卓の騎士たちは，時には異教徒の騎士あるいはサラセン人の騎士と戦うのであるが，この騎士たちは，決してキリスト教徒と区別出来ない。彼らは同じほど気高く勇敢である。異教徒もキリスト教徒も，等しく騎士道通念に包含されている。そして適当な異教徒に不足するために，キリスト教徒たちは，自分たちの武器を使わないで錆付かせるよりはと，お互い同士で戦うことになり得るのである。様々な冒険には特に水準点があるわけではなく，パリ包囲であるとか，異教徒を相手とする，うち続く戦いの他の側面とかが，絶えず，排他的な中心的テーマに私たちをひきもどそうとする武勲詩と違う点は，ここなのである。そして，聖戦が存在しなくなることが，自然界の出来事に劣らず，超自然的出来事に影響を与えることになる。それらはもはや神の計画の一部ではなく，個人の魅力なのであり，無限の多様性を持ち，手段や動機が神秘的で，自然界での人間の意思の混乱した活動と，魔法の平面で対応するものなのである。存在論的混乱も，勝るとも劣らず重要である。カロリンガ詩群の古い層では，世界は，神の意思と人間の行為という，ただ二つの平面の上にあった。しかしアーサー王伝説の世界では，マーリン[38]やモルガン・ル・フェイ[39]の形而上的身分を規定することなど，誰が気にかけるだろうか。

アーサー王ロマンスを古いエピックから区別したのは，特に愛の主題であった。武勲詩では，女主人公は存在しないか，存在する場合でも，その役割はきわめて控え目なものに制限されている。疲れを知らぬ戦士たちが，

恋のための時間を見つけることが出来たとしても，『ローランの歌』の厳しく制限された情緒の範囲では，ほとんどそれは許され得なかった。そのスタイルは，戦い，ヒロイズム，裏切り，死などを語るのに完全に適していて，個人の情緒にみがきをかけるなどということは，何も出来なかった。イタリアでアーサー王詩群を代表するものは，とりわけ愛の物語，ランスロットとギネヴィア[40]の物語，トリスタンとイズー[41]の物語であった。よく知られている北方の話がイタリア風の装いをしているのを見ることは，何とも奇妙なものである。「ここにイソッタ王妃とトリスターノ・ディ・レオニス殿について語る」「ここにスカロトの侍女が湖のランスロットへの愛のために亡くなった転末を語る」。以上は，『百の昔話』[42]にある二つの物語の題名である。「地獄篇」Ⅴのパオロとフランチェスカのエピソードは，

> ある日私どもはつれづれに，ランスロットがどうして愛にほだされたか，その物語を読んでおりました。[43]

アーサー王ロマンスが，当然のことながら，気高い心の持ち主たちの予定された誘惑者として呼びかけられているやり方の，偶発的ではあるが人を動かさずにはおかない証拠である。かくして，新しい動機がイタリアのロマンス文学に流入した。すなわち，愛と，ヒロインの運命的な力という動機である。私たちには，もう，アンジェリカとブラダマンテ[44]の姿が見える。イタリアのロマンス・エピックを存在たらしめたものは，古いカロリンガの幹への，この新しいアーサー王ロマンスの接木なのである。そしてこのことは，また，特にアーサー王のどの物語に負っているというのでもなく，また，特にマロリーに負っているというのでもなく，アーサー王ロマンスが広くゆきわたっているという雰囲気が，スペンサーの中にあることを説明することにもなる。アーサー王伝説の要素があると私たちが感じ取るのは正しいのであるが，それはスペンサーが使ったイタリアの資料を通して濾過され，変質させられている。そして，別の，まぎれもなくイギリス的なアーサー王伝説の要素が『フェアリー・クィーン』に入っている時，一般の読者は，おそらくはそれに気付かないのである。

<Ⅳ>

再び流行になったロマンティック・エピックの最初の偉大な詩人であり，アリオストの先輩であるボイアルド[45]が，(四) 古いロマンス文学と新しいロマンス文学の比較を行った。

大ブリテンは，かつて，武勇と愛のため栄誉に輝き，そのためその名がいまも海外に広まり，アーサー王に名誉をもたらしている。後にシャルルマーニュがフランスで大きな宮廷を開いたが，それは前者のようではなかった。というのは，シャルルマーニュの宮廷は愛に門を閉ざし，聖なる戦いにのみ専心していたので，私が初めに述べた他の一つと同じほどの価値も評判も持たなかったのである。というのは，人に名誉と価値を与え，光栄をもたらすものは，愛であるからだ。武勇の士に勝利をもたらし，勇気を与えるのは愛なのである。(『恋するオルランド』[46] Ⅱ，xviii. 1-3)

スカンディアノ伯爵マテオ・ボイアルドは，アーサー王ロマンスの魅力がすでに浸透していた世界であるフェラーラ宮廷のために書いたのである。私たちは，エステ公爵家の人々が，イソッタ，ギネヴラというような，アーサー王ロマンスに出てくる人物の名前を持っているのを発見する。そして公爵その人も，1470年に，出来る限り多くのフランスの本，特に円卓の騎士の本を借りるために，手紙を書くのである。ボイアルドの詩『恋するオルランド』は，大まかに言えばマロリーの『アーサー王の死』とほぼ同年代のものであり，1475年頃書き始められ，1484年に初版が出た。これは新ジャンルを開拓するものなのであるが，この新ジャンルの原則は単純で，イギリスの題材とフランスの題材との融合ということなのである。カロリンガの物語がマーサー王の物語と混合されるということは，すでに民衆の伝統の中では，時々おこっていた。しかし宮廷的アーサー王ロマンスから出た騎士道精神とロマンティックな愛を，より古い伝説の集成と系統的に融合させることは，ボイアルドの手に残されていたのである。彼の詩

の題名からして，彼が何をしようとしていたかは明らかである。ローランが武勲詩の範囲内にとどまっている限り，恋におちたローランなど，誰に考えられようか。ボイアルドはこの挑戦を受け入れ，ローランを，別の光の中に置くことに着手したのである。

> 恋におちたローランと聞いて，君よ，驚きたもうな。この世で最も誉り高い男でさえも，愛の神に，完全に打ち負かされ，征服されてしまうのであるから。強い武器，炎のような勇気，楯も鎧も，鋭い刀も，他のいかなる力も防御には役立たず，ついには愛の神に打ち負かされ虜とされてしまうのだ。
> (『恋するオルランド』i，2)

彼の用いた方法とは，ローラン，シャルルマーニュ，その他の登場人物と，カロリンガの物語の全体的な基盤を取り入れ，愛，魔術，騎士の冒険などで変化を与えるというものである。物語の内容と精神が取り入れられ，整理しなおされて，別の状況に置かれている。冒頭の場面が，いい例である。シャルルマーニュが大広間で，聖霊降臨節の祝宴を催している。その後引き続き馬上槍試合が行われることになっている。彼は貴族たちに取り囲まれて円卓についている。広間に，一人の騎士につきそわれ，四人の巨人に守られて美しい乙女が入ってくる。この乙女がアンジェリカである。オルランドと他の多くの騎士たちが，ただちに恋におちる。彼女は物語全体を動き出させることになる挑戦をもたらす。しかし，シャルルマーニュは円卓について何をしているのだろうか。そして私たちはこのような場面に，あるいはこれにとてもよく似た場面に，以前に出会ったことはないだろうか。もちろん，これは，『サー・ガウェイン』や，他のアーサー王関係の半ダースもの物語のはじまり方そっくりである—キャメロットでの大宴会，見知らぬ者の出現，一つの探究あるいは幾つもの探究のはじまり。『フェアリー・クィーン』も同じような始まり方をするはずだった。もっともスペンサーは，のちのエピックの正確さの概念に影響されて，事件の途中から飛び込み，順序的に何がはじまりで何が終りかを取り残し，その

ため，決してそこまで行き着くことがなかった。一方は愛をよびおこす泉であり，他方は憎しみをよびおこす泉である，キューピッドの泉とマーリンの泉は，物語の中で重要な部分を占めているが，これは，どちらもカロリンガの物語から移植されたものであり，また，アーサー王物語の精神に似ている。とりわけ，その気まぐれと魅力とが，蜘蛛の巣のごとくこみ入った話全体を支配しているヒロインの楽しいアンジェリカに，中心的な重要性がある。

ボイアルドは，この新しいロマンスの世界の創造者なのである。この世界では，地球上の民族が動いている。東方の異教徒の大群がキリスト教国襲撃のために集められ，シャルルは，キリスト教世界のすべての国民に参戦の召集をかける。戦闘はフランス，スペインを中心に行われるが，タタールやシナ，アフリカまで広がっている。そして，大きな歴史的な動きが，個人のロマンティックな愛によって妨げられ，紛糾させられ，結局支配されているのである。彼はもちろん，民衆と中産階級の間にすでに存在していたカロリンガの話の多数の改作を基礎にしている。民衆や中産階級は，すでに，空想的な冒険や12勇士と東洋の姫とのからみあいその他で，もとのあらすじを複雑なものにしていた。彼らは，すでに，英雄的な題材を，うかれ気分の冒険精神で扱っていた。しかし騎士道精神で全体を色付けすること，すなわち，愛と武勇とを，ロマンティック・エピックが目ざすべき二本の柱とするという観念で全体を色付けすることは，ボイアルド自身の創造である。

彼のスタイルは，率直で，無造作で，少し田舎風である。彼の語り口には，堂々とした無頓着さと，アリオストの洗練によりは単純なユーモアに近いと言えるアイロニーの底流がある。そして彼の騎士道賛美は誠意のこもったもので，完全に本物である。スペンサーは彼の本を読んだ——このことを証明する十分な類似点がある。もっともそれらは，たいして重要なものではないが(五)——ある古めかしい心の純真さのため，ボイアルドは，幾分スペンサーに近いのである。しかし，より重要なことは，彼がアリオストの世界を創造し，そしてそれゆえに，一歩隔たってスペンサーの世界を

創造したという事実である。彼は，冒険と登場人物を案出した。アリオストの作品中の主要人物すべては，ボイアルドから引き継いだものである。（名前にはわずかな変更があるので，私は混乱を避けるためにアリオストの使った名を使う。）主な主人公たち，オルランド，リナルド，アストルフォ，フェルラウ等は皆，アンジェリカの気まぐれに支配されている。誠実な恋人たちのルッジェロとブラダマンテ，そしてブランディマルテとフィオルディリジ，魔法使いのアトランテ。それぞれ気晴しの園を持つ魔女のモルガナ，アルチナ，オリジルレ。魔法の槍，楯，ライオン，ドラゴン，隠者，野蛮人。ボイアルドの世界を作りあげている以上のもの総てが，そっくりそのままアリオストに引継がれている。そしてこれらのものなしでは，私たちは，アーサー，ガイアン，キャリドー，アーティガル，ブリトマート，スカダモア，アモレット，アーキメイゴー，デュエッサ，そしてアクレイジア[47]を持ち得なかったのである。多くのエピソードに枝分れしていったこみ入った冒険，愛にかきたてられてなされた武勇の偉業，そして，いかなる扱われ方をされていようとも，宗教上の軋轢という背景――これらは，スペンサーが受けつぐはずだったものなのである。明らかに寓意的なエピソード一つ二つの他に，全体を通して流れるアレゴリーの底流をボイアルドのロマンスの中に見つけることは可能でさえある。そしてスペンサーが彼の本をそのように読んだというのは，ありそうなという以上にありそうなことなのである。

――原注――

(一) これに関しては Mario Praz, "Ariosto in England" and "Tasso in England", in *The Flaming Heart*, New York, 1958 を見よ。

(二) Barbara Reynolds 博士が私のために見つけて下さった魅力的な時代ものの歌がある。'Ruby' と呼ばれるビクトリア朝の歌で，そのヒロインは，「目まで前髪をたらして，ひざに置いたタッソーに夢中になっていた。」

(三) アーサー王の物語とカロリンガの物語のイタリアへの移動については，次の書物を見よ。J. A. Symonds, *Renaissance in Italy*, Vol. 4, Chap. 1, 4, 7; Pio Rajna, *Le Fonti dell'Orlando Furioso*, Florence, 1876 ; E. G. Gardner, *Arthurian Legend in Italian Literature*, 1930 ; A. Viscardi, "Arthurian Influence on Italian Literature", in *Arthurian Literature in the Middle*

Ages, ed. A. Loomis, 1959.

(四) 英語で書かれた最良の短いボイアルド論は, Symonds, *Renaissance in Italy*, Vol. 4, Chap. 7. である。C. S. Lewis, *The Allegory of Love*, 1936. と, E. M. Tillyard, *The English Epic and its Background*, 1954. も見よ。

(五) H. H. Blanchard, "Spenser and Boiardo", PMLA, XL, 1925. を見よ。

——訳注——

1. Duns Scotus (1265?-1308?) スコットランドのスコラ哲学者。
2. Thomas Aquinas (1225?-74) イタリアのカトリック教会の神学者で, 中世最高のスコラ哲学者。『神学大全』をはじめ多数の著書がある。
3. William Hazlitt (1778-1830) イギリスの批評家, 随筆家。彼の名を偉大ならしめるのは, *Characters of Shakespeare's Plays* (1817), *Lectures on the English Poets* (*1818*), *Lectures Chiefly on the Dramatic Literature of the Age of Elizabeth* (*1820*) などの評論と, *The Round Table* (*1817*), *Table Talk* (1821-2), *The Spirit of the Age* (*1825*), および死後まとめられた *Sketches and Essays* (*1839*) などに収められた珠玉のエッセイであろう。対象が書物であれ, 人物であれ, また人世であれ, 彼の筆は常に洞察に富み, 力と熱が溢れている。*The Kenkyusha Dictionary of English and American Literature*, 研究社, 1961 (以下 *The Kenkyusha Dictionary* と略す) 参照。
4. 従来のイギリス文学史観では, イギリスの詩の正統な流れはシェークスピア→ミルトン→ロマン派詩人とされていたが, これに対しエリオットは, ミルトンをおとしめて形而上詩人達を主派に据え, またロマン派詩人の自己主張を退けてドライデンやポープの知的な秩序感覚を再評価した。イギリス最大の文学者とされていたミルトンを鋭く批判したエリオットと共にミルトン批判を行った批評家が多く, ミルトン「排撃」とはこのことを指す。もっともエリオットは後年ミルトンに対する見方を改め, 欠陥のみならず長所も認めるという, よりおだやかな修正論文を1947年に発表している。
5. *Lycidas* Milton が1637年に書いた詩。Cambridge時代の同窓で, 母校Christ's College の Fellow となっていた Edward King が Ireland へ渡る航海の途中, 難船溺死したのを悼んだ牧歌調の哀詩。*The Kenkyusha Dictionary*.
6. Sir Walter Ralegh (1552?-1618) Raleigh とも綴る。イギリスの廷臣, 探険家, 著述家。1580年義弟とともに Ireland に渡り, イタリア, スペインの守備兵を撃退したり, 一方1578年には新領土発見のために西インドまで冒険航海を試みるなど, 彼の冒険生活はこの頃から始まった。1579年以後, Elizabeth I の寵を得てしばらく宮廷にとどまり, その後も女王の許可を得て幾度か (1584—1603) アメリカ遠征隊を送ったが, これらは多く失敗に終った。1592年 Essex 伯と女王の寵を争って破れ, その上 Elizabeth Throgmorton との情事に女王の

怒りを買い，一時ロンドン塔に投ぜられたが，1595年以後再び海外に志をのばした。彼は当時のかなり急進的な，ほとんど無神論者ともいえる文人や科学者とも親しく，彼を中心とする一派は 'School of Night' ともよばれたが，彼自身は正統派の信仰の立場を守っていたようである。*The Kenkyusha Dictionary.*

7. Lodovico Ariosto (1474-1533) イタリアの詩人。初め法律を学んだが，のち文学を志し，Este 家の Ippolito 枢機卿および Alphonso 公の兄弟に仕え，多く Ferrara にすごした。長編叙事詩 *Orlando Furioso* (1516) の作者として広く知られているが，これは Boiardo の *Orlando Innamorato* (1495) の続編として書かれたもので，その中で彼は主家を称揚している。*The Kenkynsha Dictionary* 参照。

8. Torquato Tasso (1544-95) イタリアの詩人。Sorrento に生れ，叙事詩 *Rinaldo* (1562) で認められ，Ferrara に赴き，牧歌劇 *Aminta* (1573)，さらに叙事詩の大作 *Gerusalemme Liberata* (1575) で名声を得た。Ferrara 公 Alphonso II の妹 Leonora を恋し多くのソネットを捧げているが，精神に異常をきたし，流浪の末ローマで没した。Byron の *The Lament of Tasso* (1817) は，この悲恋を扱い，ほかに Goethe 作 *Torquato Tasso* (1789) など，この詩人を主題とした作品は多い。*The Kenkyusha Dictionary* 参照。

9. *Orlando Furioso* Ariosto の長編叙事詩。1516年初版。イタリア・ルネサンス期の代表的作品。Boiardo の *Orlando Innamorato* の続編。作者の仕えた Este 家とその祖 Rogero とを称揚したもの。Agramante の指揮するサラセン人が Rodomonto および Manricardo の2勇士その他の助けを得て，パリにある Charlemagne を包囲し，キリスト教国が危機に陥った時，大帝旗下の Orlando は，恋する Angelica がムーア人 Medoro と結婚したのを知るや，狂乱の有様になったが，のちに奮戦して Agramante を倒した。なおサラセンの勇士 Rogero の Bradamante に対する恋，愛人 Zerbino の死後，Rodomont に従わなかった Isabella の貞節などを描く。*The Kenkyusha Dictionary.*

10. *Gerusalemme Liberata* (1575年に完成，1581年出版) Tasso 作の叙事詩。Godfrey の指揮する第一次十字軍が，イスラム教徒に奪われた聖地エルサレムを取りもどす話を中心に，勇将 Rinaldo を恋する Armida の物語その他のロマンを織りこんでいる。*The Kenkyusha Dictionary* 参照。

11. Sir John Harington (1561-1612) Elizabeth 女王の名付け子。女王の命により Ariosto の *Orlando Furioso* を訳す。ラブレー風の "Metamorphoses of Ajax" その他の風刺のため宮廷から追われることになる。彼は Essex 伯と共にアイルランドへ行き，女王の怒りをなだめることを委任されるが，失敗に終る。*The Oxford Companion to English Literature*, Oxford University Press, 1967 (以下 *The Oxford Companion* と略す) 参照。

12. John Hoole (1727-1803) イギリスの翻訳家。彼が訳した Tasso の *Jerusalem*

Delivered (2巻, 1763), および Ariosto の *Orlando Furioso* (5巻, 1783) は, たびたび版を重ねた。Sir Walter Scott は彼を呼んで, 'a noble transmuter of gold into lead' と評した。*The Kenkyusha Dictionary* 参照。

13. William Stuart Rose (1775-1843) イギリスの詩人, 翻訳家。1800—24年上院などの事務官。その間に大陸を旅行。1803年頃, Sir Walter Scott と相知る。*Amadis of Gaul* のフランス語訳から重訳 (1830) および *Orlando Furioso* の韻文訳 (1823—31) などがある。*The Kenkyusha Dictionary* 参照。

14. Edward Fairfax (1580-1635) イギリスの翻訳家。Tasso の *Gerusalemme Liberata* を *Godfrey of Bulloigne, or the Recoverie of Jerusalem* (1600) と題して翻訳, ほかに *A Discourse of Witchcraft* (1621) がある。*The Kenkyusha Dictionary* 参照。

15. *Rob Roy*　Sir Walter Scott の小説 (1817)。父の職業を継ぐことを拒んで勘当されたロンドンの商人の息子 Francis Osbaldistone は, Jacobites 陰謀に関係している従弟 Rashleigh に迫害されたが, Robin Hood のようなScotland 人 Rob Roy Macgregor に助けられて, 気性の激しい恋人 Diana Vernon を得, 父にも許される。Francis とその父の破滅を計った Rashleigh は結局 Rob Roy に殺される。*The Kenkyusha Dictionary* 参照。

16. Frank Osbaldistone　上記 *Rob Roy* の主人公 Francis Osbaldistone の誤りであろう。

17. Diana Vernon　*Rob Roy* の主人公 Francis Osbaldistone の恋人。

18. *Redgauntlet*　Sir Walter Scott の小説 (1824)。物語は, 1745年以後, もう一度運をためそうとして不名誉にも失敗する Charles Edward 王子の偽のイギリス帰国に関係している。熱狂的な Jacobite の Herries of Birrenswork として知られている Mr. Redgauntlet がこの運動の指導者で, 成功させるため, 部下たちの支持を得ようと, 彼の甥の Darsie Latimer (本名は Sir Arthur Darsie Redgauntlet) を誘拐する。Darsie と彼を救い出そうとする友人Alan Fairford の経験が物語の内容である。*The Oxford Companion* 参照。

19. Darsie Latimer　*Redgauntlet* の主人公。

20. Alan Fairfax　*Redgauntlet* の主人公 Darsie Latimer の友人 Alan Fairford の誤りであろう。

21. 原文には Atlantes とあるが, Atlante のことであろう。Atlante は, Ariosto 作 *Orlando Furioso* の登場人物。また hippogriff は, ギリシア神話に出てくる, 馬の体に鷲の頭と翼を持つ怪物。

22. *The Edinburgh Review*　1802年, Francis Jeffrey, Henry Brougham, Sydney Smith らが, Edinburgh で創刊した季刊雑誌。政治的には Whig 党を支持したが, 上記の批評家たちはロマン派詩人の作品を解し得ず, Lake Poets を罵倒したことで知られている。のち T. B. Maccaulay, Carlyle, Hazlitt,

M. Arnold なども寄稿したが，1929年廃刊になった。*The Kenkyusha Dictionary* 参照。

23. Byron が *The Lament of Tasso* (1817) で，Tasso と Ferrara 公 Alphonso II の妹 Leonora との悲恋をうたっていることを指す。

24. *Daniel Delonda* George Eliot の小説 (1876)。二つの筋が組みあわされており，一つは Gwendolen Harleth という女性の不幸な結婚生活を，いま一つはユダヤ人の国民的回復の希望を主題にしたものである。そのうち Gwendolen の物語を中心にした筋は，窮乏を免れるために無思慮な結婚をして苦境に立った彼女が，しだいに Daniel Delonda に思慕をよせるが，Deronda のユダヤ人であることが判明し，彼が同じユダヤ人の娘 Mirah と結婚するに従ってあきらめを悟る経過であり，円熟した描写を含むといわれている。*The Kenkyusha Dictionary* 参照。

25. Gwendolen Harleth　上記 *Daniel Delonda* のヒロイン。

26. Carolingian cycle　Carolingian とは，フランスの（メロヴィンガ朝に続く王朝で，751年 Pepin に始まり，フランスでは987年まで，ドイツでは911年まで続いた）カロリンガ朝の，という意味であるが，Carolingian cycle という言葉は，フランス文学関係の辞典には見あたらない。

27. *Le Charroi de Nimes*　ギョーム詩群に属する武勲詩。年代は12世紀の前半。Charlemagne 老いてその子の Louis が Guillaume の後見をもって王位を継承するが Louis は暗愚にして，采地の分配に Guillaume とその甥の Bertrand を除外する。Guillaume はいったんは憤って王を難詰するが，サラセン人の蟠踞する土地を請って所領にもらいうけ，サラセン軍攻略に立ち向う。ニームに立ち向った時，Guillaume は策をもって，自らは商人に，Bertrand 以下諸将は荷車ひきに化け，兵は樽の中に隠して城内にうまく潜入し，まんまと城を占領する。Charlemagne から後事を託された Guillaume の暗愚な若王に仕えて忠誠を尽す美しい詩行に満ちた作品である。日本フランス語フランス文学会編，『フランス文学辞典』，白水社，1974 参照。

28. *Le Couronnement de Louis* ガラン・ド・モングラーヌ詩群に属する武勲詩。年代はガストン・パリスの推定では1160年頃。Charlemagne 老いて，死の近きを感じとると，王位を一子 Louis に譲ろうとする。しかし Louis は性暗愚にして王たるの自信を持てない。この時，Guillaume 進み出て，王冠を手にとり，Louis の頭に授けて生涯自らその保護者たることを誓う。『フランス文学辞典』。

29. *La Chanson de Roland* 現存する武勲詩のうち，最も古く最も美しいもの。シャルル大帝がイスパニア遠征を終えて帰る時，778年8月，ピレネ山中でバスク族の襲撃にあい，ロランを含むその殿軍が壊滅したという史的事実を踏まえている。詩人は11世紀を風靡していた十字軍精神を基調にして，このピレネの悲劇を体系づけ，バスク族を回教軍に替え，ガヌロンという人物を創造してそれの敵

方への内通をもってピレネの悲劇の原因とした。『フランス文学辞典』参照。

30. Turoldus. Théroulde, とも言われる。*Chanson de Roland* の最後の節に次の文がある。Ci falt la geste que Turoldus declinet. declinet の意味があいまいで，これが作者なのか，作者が作る時に使った伝記の作者なのか，写本の写し手なのか，世に明らかにした人なのか，断定出来ない。*Grand Larousse encyclopedique*, 1964 参照。

31. Oliver, Turpin, Ganelon いずれも *Chanson de Roland* の登場人物。

32. 原文は次のとおりである。

Nos avons dreit mais cist gloton ont tort.

33. Redcross Knight　*The Faerie Queene* 第一巻の主人公。

34. Sir Artegall　*The Faerie Queene* 第三巻のヒロイン Britomart の恋人。

35. 原題は *Realidi Francia*

36. Sir Thomas Malory (?—1471) イギリスの著述家，*Le Morte Darthur* (1469または1470年完成) の著者。Warwickshire の旧家の出で，1436年Warwick 伯 Richard Beauchamp に従ってフランスへ出陣した。二，三年後に結婚したが，その後たびたび重罪で告発され，逮捕，監禁された。そのような人物が，文学史上画期的な大作を完成した創作的・内面的活動の真実は，謎に近いが，頭韻詩 *Morte Arthure* とフランス語の物語を資料にした彼の作品が，1485年 Caxton によって編集され，*Le Morte Darthur* として出版されて以来，Arthur 王伝説の集大成と見なされ，また散文物語作者の父たる位置を占めて，後世のイギリス文学に与えた影響ははなはだ大きい。*The Kenkyusha Dictionary* 参照。

37. Chrétien de Troyes (1135ごろ—1190以前—G. コエン説) 12世紀の最も著名な詩人，ロマン・クールトワ作者。伝記不詳。作家としての出発は，自ら作品の冒頭に記したとおりであるとすれば，オウィディウスの作品の翻訳または翻案から始まった。古代文学から出発してブルターニュ物語をいちはやく手がけ，つづいて，「新作の物語」『エレックとエニード』(1170)，『クリジェス』(1176—77)，『ランスロ，または車上の騎士」『イヴァン，または獅子の騎士』等，いずれも，古代文学の伝統とブルターニュの題材とを巧みに結合した武者修業恋愛物語を開拓し，男性の武勇と女性の恋愛心理に新しい劇的相克の主題を見いだし，繊細な心理描写の曲折をもって，読むための「小説」，「物語」の類型を欧州文学の中に確立した。特に『ランスロ』にあっては作者が言うように，その主題はシャンパーニュ伯夫人マリから与えられ，すでに南仏に栄えた宮廷風恋愛の理想とする貴婦人への絶対服従が Arthur の宮廷を背景として描き出されている。

しかし，クレチアンは古代文学の模倣とブルターニュ的要素と南仏宮廷恋愛の理想とにふみとどまらず，三転して『ペルスヴァル，または聖杯物語』(1181以後) を書いたが，これは前記『ランスロ』と同様未完に終っている。クレチアンが最後にとりあげたのは，ケルト的要素と古代文学的要素に加えて，贖罪，永遠の

救霊に関するキリスト教的着想であったが，現在知られる限りにおいて，クレチアンの作品以前にこの主題を扱った作品が見い出せないため，彼をもって，やがてヨーロッパにおける「聖杯物語」の流行を生み出した最初の詩人と考えることも当を失しないであろう。ただクレチアンの作品は，未完のため，登場する「聖杯」にせよ，「傷つける王」にせよ，その意義づけは直接表現されていない。『フランス文学辞典』参照。

38. Merlin　5・6世紀頃，Wales の伝説上の詩人，予言者。Arthur 王伝説では魔術師とされている。*The Kenkyusha Dictionary* 参照。

39. Morgan le Fay　Arthur 王の姉妹の一人で魔力の所有者，King Uriens に嫁した。Maroly の *Le Morte Darthur* では彼女は夫および Arthur を殺そうと企てる。また重傷の Arthur を連れ去る舟の三人の貴女の一人である。*The Kenkyusha Dictionary* 参照。

40. Lancelot and Guinevere　Arthur 王伝説中の人物。Arthur 王の円卓の騎士の一人である Lancelot は 王妃 Guinevere と恋におちる。

41. Tristan and Iseult　Tristan は，Tristram, Tristrem とも呼ばれる。Arthur 王の円卓の騎士の一人。孤児となって 伯父 Cornwall 王 Mark に養われていた Tristan は，王の妃となるべく迎えられた Iseult と恋におちる。

42. 原題は，*Qui conta della reina Isotta e di M. Tristano di Leouis*；*Qui conta come la damigella di Scalot mori per amore di Lancialotto del Lac* from the *Cento Novelle Antiche*.

43. Paolo and Francesca. Ravenna 伯 Giovanni de Polenta は Rimini の Giovanni Malatesta に戦功の報賞としてその娘 Francesca を与えた。しかし夫は容貌醜怪でびっこだったため，彼女は夫の弟すなわち美貌の Paolo と不義の恋に陥ったが，露見して1289年両人ともに殺された。*The Kenkyusha Dictionary* 参照。

44. Angelica, Bradamante いずれも *Orlando Furioso* に出てくる女性。

45. Matteo Maria Boiardo (1441-94) イタリアの騎士・詩人。未完の騎士物語詩 *Orlando Innamorato* (*Orlando the Enamoured*, 1486) 69歌は Charlemagne 伝説に取材したもの。*The Kenkyusha Dictionary* 参照。

46. *Orlando Innamorato* Boiardo の騎士物語群。3部69歌で未完。初版は1・2部だけ，1486年。Cathy の王女 Angelica は愛の泉を飲んで Charlemagne の家臣 Rinaldo を恋したが，憎しみの泉を飲んだ彼にきらわれ，危うい所を Orlando に救われて，フランスに連れて行かれる。泉の作用で Rinaldo に愛されたが，今度は彼女の方で彼をきらった。未完で残されたこの詩を F. Berni が改作し（出版1541）Ariosto が続編 *Orlando Furioso* を書いた。*The Kenkyusha Dictionary* 参照。

47. Arthur, Guyon, Calidore, Artegall, Britomart, Scudamour, Amoret, Archimago, Duessa, Acrasia いずれも *The Faerie Quenee* 中の人物。

――あとがき――

これは Graham Hough, *A Preface to the Faerie Quenee,* Gerald Duckworth and Co. Ltd., London, 1962 の部分訳である。

Graham Hough について簡単に経歴を紹介すると，彼は1908年リバプールに生れ，リバプール大学及びケンブリッジ大学のクイーンズ・カレッジで教育を受けた。1930年からシンガポールのラッフルズ・カレッジ（現在のマラヤ大学）で英語を教える。第二次大戦中はシンガポール義勇軍の砲兵隊員であったが，捕虜となって終戦をむかえる。戦後ラッフルズ・カレッジで1946年まで英文学教授をつとめ，ジョンズ・ホプキンス大学の客員講師として渡米し，翌年ケンブリッジ大学のクライスト・カレッジのフェローとなり今日に至る。

Hough の著書には，*The Last Romantics* (1949), *The Romantic Poets, The Dark Sun* (1956), *Image and Experience* (1960), *Legends and Pastorals* (1961) などがある。